



研究者の評価と責任

日本科学未来館 館長 毛利 衛

もうすぐアテネオリンピックが開催されます。日本にとってもっともメダルが期待される種目に女子マラソンがあります。選手層が厚いので日本代表になることすら至難の業です。その選考会で新しい時代を反映する決定がなされました。誰の目で見てももっとも実力がありメダル最有力の高橋尚子選手が選ばれなかったことです。記録を参考にする選考レースは4回ありますが過酷な体力と精神力を要求されますから勝負できるのは1回か2回しかありません。抜群に実力のある高橋選手ですら調整が失敗して一度ではいい結果を出せませんでした。もう一度予選で走って証明する機会はありました。しかしアテネでのメダルを考えるとよけいなエネルギーを使うことは得策ではありません。従来への慣習ではその程度の予選結果でも過去の実績から十分最後に選考されると監督は判断しました。より実力の落ちるほかの選手は必死になって選考に残るために挑戦します。選考会では微妙な内容でしたが、もはや一般社会のほうのほうがはっきり透明性のある説明を望んでいました。これが日本としてアテネにおける最終目標にどのような結果になるかだれもわかりません。

いまや、研究者の間にも透明性のある評価がきびしく要求されています。最終目標は世界でメダルが取れるほどレベルの高い研究成果をたくさん出すことです。科学技術創造立国の号令の下に多額の予算が計上され、10年前に比べると多くの大学や研究所で実験装置や付帯設備が飛躍的に向上しました。それだけ税金を投入しましたから当然その用途に一般の人たちは関心を示します。研究者に説明責任と業績評価が要求されます。マラソンのようにひとつのパラメータで予選をして業績が評価できるわけではありません。また、過去に良い仕事をした人やグループが必ずしも新しい発想に基づく画期的な研究成果を出せるわけでもありません。評価は何のためにするのでしょうか。研究するお金を出してくれた行政府、一般の人々への説明責任を果たすためでしょうか、それともさらにもっとレベルの高い研究に挑戦するお金をもらうためでしょうか。この両方が同時に満足されるべきでしょう。分野外の人々にその価値を理解してもらうのはそう簡単ではありません。量的には発表論文数および被引用回数、質的にはより世界に通じる学会誌への発表数があります。これも両方同時に必要でしょう。

研究者のおかれている環境も近年急速に変わってきています。個々の研究テーマの社会的意義も変わってきています。しかしなぜ科学技術研究そのものが必要かという社会的要請は短期長期の差はあれ変わりません。この要請が何かということをもどの研究者であれ、はっきり認識していなければ、当面の評価に良い点数をとることだけに追従し、合格点すれすれの研究が増えるばかりで、本来の大きな社会的目標に達しないことになります。

太陽からは大量のプラズマの流れが地球に注いでいます。実際に大気を通さずに見た自然の核融合炉太陽はまさにエネルギーの固まりであり生命とは何ら関係のない物質でした。それから発する多量の光に照らされる地球は青く白く輝いています。空気や水がありさらに生命が存在する貴重な地球とこれらが存在してもしなくても宇宙空間に存在する普遍的な物質としての地球を私は同時に実感しました。

プラズマや核融合学会に属している会員は地球に生命をもたらした根元的なエネルギー源を研究しています。社会的な評価が厳しくなることは研究者としての倫理と自分の果たす役割をじっくり考えることを要請されていることです。自分自身にとってプラズマ・核融合は何なのか、社会的責任は何なのかを業績目録を作成するたびごとに自問する良い機会だと思います。アテネオリンピックの結果以上にプラズマ・核融合の研究成果が日本の将来に影響するのですから。

